



木津川沿い山背古道散策④（玉水～山城多賀）

観察河川：玉川、南谷川（支流とも）

淀川水系の木津川流域を南から北へ木津川右岸の山背古道散策シリーズです。今回はその4としてJR玉水駅からJR山城多賀駅まで、井出町の北部を歩きます

- 1：日時 2022年5月26日（木）10時45分 雨天中止の場合は前夜メールします
- 2：集合 JR奈良線玉水駅西口広場（井手町観光地図&ベンチあり）
（奈良方面から10：42着 京都方面から10：34着あり）
- 3：持ち物 弁当、飲み物、雨具、双眼鏡 等
- 4：目的地 井堤寺跡、小野小町塚、地藏禅院、玉津岡神社、井手町文化財展示室、谷川ホテル公園、高神社
- 5：行程 約7km
- 10：45 JR奈良線玉水駅 観光地図の掲示板前で本日のコース説明 →スタート
玉川の天井川状況（JRを超える）を確認後、堤防上を上流へ 0.8km
- 11：10 井堤寺跡（寺跡碑より200m東に五重塔遺跡、添付資料参照）11：15発 0.6km
- 11：25 小野小町塚（添付資料参照）11：30発 0.2km
- 11：40 地藏禅院（眺望は良いが有名なシダレザクラには時期遅い 八重桜も遅い）
シダレザクラは1727年植樹、円山公園の先代のシダレザクラと親木同士が姉妹木と言われ京都府の天然記念物に指定。なお円山公園の2代目シダレザクラ樹齢80年は桜守15代佐野藤右衛門が初代の種から育てた若木を植えたものだそうです
- 11：50 玉津岡神社（階段の参道）トイレあり 弁当 12：20発（山背古道）0.9km
- 12：40 自然休養村管理センター（文化財展示室）（井堤寺跡等出土品展示）10名位毎に鑑賞
（展示物の専任研究員は現在欠員で解説不可）トイレあり 13：30発（山背古道）0.6km
- 13：40 三昧山経由（眺望） 13：45発（山背古道）0.9km
- 14：00 南谷川と支流（蛇谷川？）合流点 14：05発 南谷川を上流に（山背古道）0.6km
- 14：15 谷川ホテル公園 トイレあり 14：25発 0.3km
- 14：40 高神社 参道（階段）を往復 14：50発 0.3km
- 15：00 谷川ホテル公園経由 トイレ 15：10発（山背古道）0.9km
- 15：30 多賀北部公民館経由 13：30通過 奈良街道を南へ0.7km
- 15：50 JR山城多賀駅 着 次回の例会連絡ほか
- 16：00 JR山城多賀駅 解散 山城多賀駅発 奈良方面 16：10発 次は16：40（30分毎）
京都方面 16：04発 次は16：34（30分毎）

以下参考資料です コントロールキーを押しながらクリックしてリンク先表示してください

<http://www.town.ide.kyoto.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/3/yamasirokodougaidobook.pdf>
[山背古道探検地図 \(yamashiro-kodo.gr.jp\)](http://yamashiro-kodo.gr.jp/)

次頁以降の資料は Wikipedia ほかネット情報です 当然ながら諸説ありますのでその旨ご了承ください

○井堤寺跡（井手寺、井出寺、井提寺）

橘諸兄が建立したと伝えられる、井手寺は、東西南北とも約240メートルの規模を誇り、塔や金堂を中心に七堂伽藍の整った大きな寺であったと伝えられています。

井手寺跡周辺では、平成16年から本格的に発掘調査がはじまり、彩色を施した「垂木先瓦」や「軒丸瓦」「軒平瓦」、建物の礎石をおいた跡などが発見されました。

西方浄土を形にしようと境内から玉川にかけて植えたやまぶきは「井手の玉川」「やまぶきの玉川」として世に知られたといえます。

五重塔跡の姿明らかに／井手・栢ノ木遺跡（井手寺跡）

—地域新聞「洛タイ新報」の2021年4月15日—より

奈良時代中ごろに政権の中樞を担った橘氏の氏寺として創建され、平安時代にかけて存続した「井手寺」の五重塔跡が、井手町新庁舎建設予定地で発見された件で、調査を進めている（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センターは14日、報道向けに現地説明を行った。同跡は、国指定史跡級の文化財であることが分かった。17日（土）午前9時～正午、町民向けに現地公開される。一般向けの公開は、同日正午～午後4時。

調査名は場所（井手町井手栢ノ木＝かやのき）を基にした「栢ノ木遺跡・第13次調査」。

これまでの調査で井手寺跡は同地域に241・2区四方の寺域を有していたことが分かっているが、塔や金堂など主要伽藍の配置は分かっていた。

今回見つかった塔跡は既知の寺域の東限から約50メートル東へ離れている。他の主要伽藍と別の区画を設け、「塔院」を形作っていたと推定される。基壇（周囲より高くした建物の土壇）は約15区四方のほぼ正方形で、残存高は70センチ、北辺と西辺に階段が見つかった。規模からみて、五重塔と考えるとよいという。

地方寺院で塔院が造られるのは稀な事例といい、同センターは「当時の橘氏の権勢を示す国家規模の一大事業だったと考えられ、古代における地方寺院の実像を明らかにする重要な成果」と評した。



井手寺柱跡の碑は五重塔跡の西約200区にある

出土した瓦から奈良時代後半から平安時代前期に建立されたと考えられ、平安時代中期には修理が行われたようだ。石材や出土遺物に熱が加えられた痕跡がないことから、火災ではなく老朽化して自然に崩壊し、大量の瓦を残して放置されたまま、鎌倉時代に荒廃したと考えられる。それだけに、「乱石積」と呼ばれる工法が用いられた階段の状態は「日本で一番残りがいい」と話す識者もあるという。発掘を担当した調査課の福山博章主任によると、今回見つかった塔跡は、文化財として国指定史跡級の価値があるという。

上原真人京都大学名誉教授（井手寺跡調査委員長）は本紙の取材に、「使われている瓦に（奈良の）都と同じ奈良三彩があり、別院の形をなしている。塔を中心とした区画があるのは、奈良の大安寺くらい。あちらは七重塔なので匹敵するとまで言えないが、都にモデルがある形で寺を造っている。橘氏の勢力がどれくらいのものか、どのように変遷したかが具体的に分かった」とコメントした。

—地域新聞「洛タイ新報」の2021年4月15日—より

橘諸兄が創建、京都・井手寺跡で「塔の基壇跡」初確認

<毎日新聞 2021/4/14 21:37 より>



五重塔と推定される基壇の角部分。石積みで囲まれ、左手には階段も見える＝
京都府井手町で 2021 年 4 月 14 日午後 2 時 42 分、鈴木健太郎撮影

奈良時代の左大臣で歌人、橘諸兄（たちばなのもろえ）（684～757 年）が創建した「井手寺」跡と伝わる京都府井手町の「栢ノ木（かやのき）遺跡」で、奈良時代中期（8 世紀）の塔の基壇跡が初めて確認された。基壇は約 15 メートル四方で、奈良時代前半に建立された薬師寺（奈良市）東塔を上回り、五重塔と推定される。専門家は「諸兄の権勢がうかがえる貴重な発見」としている。府埋蔵文化財調査研究センターが 14 日、発表した。諸兄は「井手左大臣」とも呼ばれ、同遺跡付近に氏寺があったと伝承されてきた。近年の発掘調査で、建物や回廊の遺構とみられる柱穴や、彩色された三彩垂木先瓦（さんさいたるきさきがわら）の破片などが確認された。寺域は約 240 メートル四方と推定されたが、塔など確実な寺院建物の遺構は見つかっていなかった。

その昔、栄華を誇った井堤寺。現在その跡である場所は田畑や住宅が並びほとんど見る影もない。

井堤寺跡の石碑が立つこの場所には、発掘された当時の礎石が残されており、建てられたアズマヤの瓦は発掘された当時の瓦を復元したものが使われている。

○小野小町塚

Wikipedia 他より

小野小町塚(こまちづか)は、[六歌仙](#)及び[三十六歌仙](#)の一人[小野小町](#)の墓と伝えられる塚。零落の果てに死んだとされる小野小町の墓は東北から九州まで全国にあると伝えられ、そのうち塚の形状のものについては「[小野塚](#)」「[小町塚](#)」等々称される。この項では、[京都府綴喜郡井手町](#)の小野小町塚について記述する。

井手町に伝わる伝承では、小野小町は、晩年を[井提寺](#)(円提寺)に住み、玉川堤を散策したと伝えられる。小町の墓と伝えられる塚は、[玉津岡神社](#)参道の右脇にあり、周囲を石垣で囲った土壇上の礎石の上に、ほぼ立方体をした自然石を四個積み重ねている。この塚石は、井提寺(円提寺)の[礎石](#)とも伝えられる^{[1][2]}。

1143年([康治](#)2年)「山城国井堤郷旧地全図」(模写1326年、1803年)で、現在の場所に建立されているのが描かれている。ただし、この模写は「[椿井文書](#)」ではないかと指摘されており、定かではない。

背面に「清林」と刻まれており、建碑者の法名と考えられる^[3]。

小野小町が晩年を井手町で過ごしたとされる伝承の根拠としては、9世紀後半に成立したとされる小野小町の家集『[小町集](#)』や『[新後拾遺和歌集](#)』に「色も香もなつかしきかな蛙鳴く井出のわたりの山吹の花」と詠まれていることから、井手町に小野小町が実際に訪れていたことがうかがえる。また、鎌倉時代に成立したとされる『[冷泉家流伊勢物語抄](#)』やその記述に由来する近世の『[山城名勝志](#)』『[和漢三才図絵](#)』等によると、小野小町は、晩年、井提寺(円提寺)の別当の妻になり、69歳で井提寺にて没したとされる

平安時代初期の歌人・小野小町については、各地に生誕、終焉地の伝承がある。

井手の玉津岡神社参道の坂途中に、小野小町之塚といわれる4つの四角い石積みがある。石は井手寺(井堤寺、光明寺)の礎石を利用したものという。

井手を歌った小町の歌に、「色も香もなつかしきかな蛙鳴く井手のわたりの山吹の花」(『小町集』流布本61、異本40。『新後拾遺和歌集』145)がある。

◆**歴史年表** 塚の詳細、変遷は不明。

平安時代、小野小町(815?/826?-898?)は山城の井手の里に住し、井手寺の別当の妻になり、69歳で井手寺で亡くなったという。(『冷泉家記』『冷泉家流伊勢物語抄』)

1142年、小町墳が現在地に描かれている。(「山城国井堤郷旧地全図」、模写は1326年、1803年)

◆**小野小町** 平安時代前期の歌人・小野小町(おののこまち、809?/815?/826?-901?/898?)。詳細不明。小野氏の出という。出羽国(山形県・秋田県)の郡司良真(よしざね)・当澄(まさずみ)・常澄・篁(たかむら)・小野滝雄・藤原常嗣(つねつぐ)・洛北・市原の小野良美の娘、美材(よしき)・好古(よしふる)らの従妹、篁の孫娘などともいう。小町とは禁中局の名称とされ、本名は小野比右姫ともいう。采女(うねめ)とも、第54代・仁明天皇、第55代・文徳天皇の更衣(こうい)、氏女(うじめ)、中(ちゅうろう)女房ともいう。文徳・清和・陽成年間(850-884)、承和・貞観年間中頃(834-868頃)に活動した。文屋康秀、凡河内躬恒、在原業平、安倍清行、小野貞樹、僧遍昭らとの歌の贈答がある。恋の歌に特徴あり、漢詩の表現に通じた。『古今集』以下の勅撰集に60首余入集、『三十六人集』の一つ後人撰家集『小町集』がある。絶世の美女として歌舞伎、義太夫、謡曲など「小町物」の題材になった。六歌仙・三十六歌仙の一人。

◆**井手と小町** 井手で小野小町の伝承がある。後世の伝承として、小町は大江惟章の妻になり、第54代・仁明天皇の子・其蔭親王に仕えた。住吉で尼になり、井手寺の別当の妻となったという。(『謡曲拾葉抄』『関寺小町』、江戸時代、1772年)。

また、小町は山城井手の里に住したという。(『百人一首抄』、烏丸光広、1559-1638)。

小町は69歳で井手寺で亡くなったともいう。(『冷泉家記』、鎌倉時代の『冷泉家流伊勢物語』『和漢三才図会』、1751)

塚周辺には、阿元坊、本願坊、中坊などが存在し、遊行聖、その妻・巫女らが住していたともいう。各地に残る小町の老残落魄伝説を広めたのは、これら漂白宗教者で鎌倉時代以前の猿女君(さるめのきみ)、室町時代以後は熊野比丘尼(びくに)だったともいう。

○玉津岡神社

上井手地区にある玉津岡神社は、社伝によれば、540年に下照比賣命（しもてるひめのみこと）がこの地に降臨（こうりん）し、それを祀ったのが起源とされています。本殿は貞享4年（1687年）の造営で京都府登録文化財、鎮守の森は文化財環境保全地区に指定されています。また、境内には橘諸兄（たちばなのもろえ）を祀った橘神社があります。

欽明天皇元年（540年）、玉津岡の南に下照比賣命が降臨、そこでお祭りをした「玉岡の社」が玉津岡神社の起源。「玉岡の社」は「玉岡春日社」、江戸時代に「八王子社」と称号を変え、現在は玉津岡神社となる。1878年（明治11年）には、八王子社（玉津岡鎮座）、春日社（西垣内鎮座）、田中社（宮の前鎮座）、八阪社（西前田鎮座）、天神社（玉の井鎮座）の五社が八王子社殿（玉岡の社）に合祭している。天神社（玉の井鎮座）は棕本天神社を移したもので、その創祀は天平3年（731年）9月であり、創祀者は橘諸兄公とされる^[1]。境内には橘諸兄とその一族の一人楠木正成公を合祭した橘神社がある。また玉津岡神社の社紋は「流れ山吹」であるが、これは楠木正成の家紋「菊水」と同じものともされている。ちなみに主神の下照比賣命は「家内和合の神」である。江戸時代に春日造で建てられた本殿は京都府登録文化財、鎮守の森は文化財環境保全地区となっている。

● [玉津岡神社 | 観光情報検索 | 京都“府”観光ガイド～京都府...](#)

https://www.kyoto-kankou.or.jp/info_search/?id=410

玉津岡神社 お気に入りスポットに登録する 玉津岡神社 うっそうとした木々に覆われた境内は、真夏日もひんやりと空気が漂い、濃い緑陰をつくっている。本殿は貞享4年（1687）再建の春日造。境内には橘神社があり橘諸兄の末えいの橘正成をまつっている。隣接する地蔵禅院には府の天然記念物・名木10選に選ばれている。しだれ桜がある。



玉津岡神社（たまつおかじんじゃ）は、京都府綴喜郡井手町にある神社。下照比賣命（したてるひめのみこと）を主祭神とする。祭神は次の通り。玉津岡六柱の大神。欽明天皇元年（540年）、玉津岡の南に下照比賣命が降臨、そこでお祭りをした「玉岡の社」が玉津岡神社の起源。「玉岡の社」は「玉岡春日社」、江戸時代に「八王子社」と称号を変え、現在は玉津岡神社となる。1878年（明治11年）には、八王子社（玉津岡鎮座）、春日社（西垣内鎮座）、田中社（宮の前鎮座）、八阪社（西前田鎮座）、天神社（玉の井鎮座）の五社が八王子社殿（玉岡の社）に合祭している。天神社（玉の井鎮座）は棕本天神社を移したもので、その創祀は天平3年（731年）9月であり、創祀者は橘諸兄公とされる。

主祭神: [下照比賣命](#)

例祭: 4月3日・10月16日

所在地: [京都府綴喜郡井手町](#)井出東垣内 63

社格等: 旧郷社

○ 自然休養村管理センター（文化財展示室）



町内出土品を展示し、パネルにより説明。（定休日：土・日・祝日）

○ 谷川ホタル公園

谷川ホタル公園は、ゲンジホタルの生息地、南谷川に、自然環境や美しい景観をそのまま生かした公園。6月の中旬ごろから、夜になると、やわらかな光りをともしたホタルが飛びかい、夏の訪れを告げる。

日本に生息するホタルは、約34種に及び、そのうち水棲といわれるのは、ゲンジボタルとヘイケボタルの2種のみで、

他のものは、生涯陸上で生活します。

ゲンジボタルは、北は青森から本州、四国、九州の全域で生息しますが、水がきれいであることが条件です。

それは、ゲンジボタルのエサであるカワニナにとっても大切なことです。

カワニナは、山地の湧水には、あまり発生せず、自然と人がバランス良く保たれている場所に大量に発生します。

（谷川ホタル公園案内板より抜粋）

○ 高神社（たかじんじゃ）

高神社は、古くから多賀郷に住む人の信仰を集めてきました。鎌倉時代の高神社文書には、社殿改築の時に猿楽（さるがく）が奉納されたとあり、これは日本で最初の猿楽に関する記録の一つとなっています。京都府指定文化財の本殿は慶長9年（1604）の建立で、桃山時代の絢爛豪華（けんらんごうか）な建築を今に伝えています。また、社（やしろ）を囲む鎮守の森は、京都百景の一つです。

京都府綴喜郡井手町多賀天王山に鎮座する式内社です。当地の地名「多賀」は『倭名類聚抄』に記載される山城国綴喜郡「多可郷」の遺称であり、古い地名です。社伝によれば、欽明天皇元年（540年）、東嶽に神霊が降臨し社殿を建てて祀ったと伝えられています。その後、

和銅四年（711年）に字川辺に「東村宮」を建立

神亀二年（725年）に字西畑に「久保村宮」を建立

神亀三年（726年）に字綾の木に「谷村宮」を建立

と伝えられており、この頃には三地区に分かれて祀られていたようです。ただし、現在は「綾ノ木」の地名だけが当社西方700mほどの地に残っており、他の字は不明です。

さらに社伝によれば、元慶二年（878年）の谷村宮の龍神祭で死者の出る喧嘩騒動が発生したため、仁和元年（885年）に現在地の天王山の地に鎮座し三社が統合されたと伝えられています。

近世以前の当社は「大梵天王社」と呼ばれ、大梵天王を祀っていました。社伝では宇多天皇の宸筆による「大梵天王社」の額と称号を賜ったと伝えられ、かなり古くから大梵天王を祀っていたことが示唆されています。

現在の御祭神は「伊邪那岐命」「伊邪那美命」「菊理姫命」ですが、大梵天王は明治の神仏分離により高御産日神に変えて祀られることが多く、当社でも高御産日神を祀るとする資料があります。社伝でも天平三年（731年）に勅願により高御産日神の名より「高」の字を採って「多賀神社」を「高神社」に、「多賀村」を「高村」に改称したと伝えられています。

なお、高神社・高村は承久三年（1221年）に再び多賀神社・多賀村に改称したと伝えられています。

このように当社は異例なほどの複雑な社伝が伝えられています。ただ、高御産日神は造化三神の一柱であり抽象性の高い神なので天平年間に祀られていたとするのは疑問で、後世に大梵天王を祀るようになってからの付会ではないかと思われま

す。また、「伊邪那岐命」「伊邪那美命」を祀るのは、伊邪那岐命が「多賀」の地（一般には兵庫県淡路市多賀の「伊弉諾神宮」もしくは滋賀県多賀町多賀の「多賀大社」）に鎮まったとされることに因み、当地の地名「多賀」が関連付けられたことによると思われます。

当社のように豊富な社伝が伝えられていてもどこまで史実が反映されているかを明らかにするのは難しく、また当社が当初どのような人々がどのような神を祀ったかも現状では不明です。一説には多可連なる渡来人がいたとも言われていますが根拠はなく、今後の研究が俟たれるところです。

なお、当社には文永八年（1271年）の社殿造営の様子を伝える『高神社流記案』が伝えられています。それによれば、社殿の造営にあたって「宝堅（ほうがため）」と呼ばれる神事が行われ、そこで猿楽が奉納された旨が記されています。これは猿楽に関する最古の資料であり、極めて重要です。

当社にはその他400点もの文書が伝えられており、中世以降の神社の様子、民衆の暮らしを知る上で貴重なものとなっています。